

## 大分県宇佐神宮と奈良県手向山八幡宮のデジタルアーカイブ ～奈良時代の大仏造営にまつわる地域資料～

加藤真由美、後藤忠彦（岐阜女子大学）

### 1. 宇佐神宮（大分県宇佐市南宇佐亀山）

#### (1) 由緒

宇佐神宮は全国八幡宮の総本宮であり、祭神として応神天皇・比売大神・神功皇后を祀っている。現在は小椋山（亀山）に鎮座しているが、宇佐嶋とよばれる御許山（馬城峰）が発祥の聖地であり、御許山（馬城峰）には摂社大元神社が鎮座し、現在でも毎月の祭祀が厳修されている。



図1 大鳥居

#### (2) 東大寺（奈良県）への御幸と神輿

宇佐神宮は、天平勝方4（752）年の天武天皇の東大寺盧舎那仏の大仏造立事業に協力し、その際、宇佐神宮で造った紫の神輿に八幡大神を擁して入京し、大仏殿の近くの鏡池（八幡池）の東に手向山八幡宮を建立し鎮座した。このことが神輿のはじまりであり、宇佐は神輿の発祥地とされている。



図2 東大寺御神幸記念碑

#### 【東大寺御神幸記念碑文】

天平勝方4（752）年聖武天皇の進めた東大寺大仏造立事業が完成しました。八幡神はこの事業を支援したため輿に乗って入京し完成間近の大仏を拝しました。これが神輿の起源とされています。

宇佐八幡神輿フェスタは1250年の時空を超えて八幡神輿の大仏参拝を再現し、「神仏集いと神輿発祥の地・宇佐」を全国にアピールすることを目的に計画されました。2002年10月5日、児童・生徒を含む宇佐市民など約500人の行列が宇佐八幡神輿を奉じて東大寺を参拝しました。多くの人びとの協力によって、歴史に残る大行事が見事に達成されたことをここに記します。

2003年8月2日

宇佐八幡宮神輿フェスタ振興協議会  
会長（宇佐市長）時枝正昭

#### (3) 宇佐神宮本殿の八幡造り

八幡造りは、本殿が前殿の外院と奥殿の内院の二つの院、その間の馬道からなっており、外院と内院の屋根はそれぞれ切妻造の造り合いです。両軒に大きな黄金の金桶が渡されている。



図3 国宝 宇佐神宮本殿の八幡造り

これが古い神社建築様式と伝えられる

八幡造りである。大神は、夜は御帳台のある外院、昼は御椅子の置かれた内院へと移動するとされ、この神の移動が八幡造りの由来となっている。

## 2. 手向山八幡宮（奈良県奈良市雑司町）

### （1）由緒

奈良時代、宇佐神宮からはじめて分祀、勧請された八幡宮であり、八幡神の託宣により東大寺大仏殿の守護として奈良の地に降り立たとされている。はじめは平安宮南梨原宮、次いで東大寺近くに遷り（鏡池、八幡池とも）、鎌倉時代、社殿が戦乱によって焼かれ、現在の地に遷った。

明治以前は東大寺八幡宮、手向山八幡宮などと称され、明治初年の神仏分離以降は東大寺から独立したとされる。



図4 手向山八幡宮由緒書き

手向山八幡宮  
この手向山八幡宮は、奈良時代聖武天皇が大仏の造営をされたとき、これに協力のため七四九（天平感宝元年）年に宇佐から八幡宮を向かえ、大仏の近くの鏡池（八幡池）の東側に鎮座したのに始まる。そして、以後東大寺を鎮守したのである。  
鎌倉時代の一二五〇（建長二年）に北条時頼によって現在地に遷座した。（略）

【〓】由緒書き

### （2）校倉造りの神宝庫

楼門の右脇に建っている校倉造りの神宝庫は奈良時代の建造物で、国指定重要文化財に指定されている。かつては御神庫やお渡りの神輿などを祀っていた。この神宝庫は、正倉院の六つの倉の内のひとつ（奈良時代に解体した部材）を江戸時代に移築したものである。軒瓦には「神宝転害会又蔵」の文字が刻まれている。

校倉造りは校木（横木）を交互に組み上げて壁体とした構造様式をいい、校木には円・四角、三角の角材があるが、手向山八幡宮神宝庫は正倉院と同じく、三角状の角材である。

### （3）菅公句碑と菅公腰掛石

菅原道貴公の和歌「このたびは 幣もどりあえず手向山 もみじの錦 神のまにまに」は手向山八幡宮内で詠まれたとされており、その際、腰を下ろして詠んだとされる菅公腰掛石もある。この和歌は京都から吉野への天皇の御幸に同行する際に詠まれた歌であり、現在も手向山八幡宮は「もみじの名所」として知られている。

## 3. 地域間で形成される文化資料のデジタルアーカイブ化

宇佐神宮（大分県）と手向山八幡宮（奈良県）は奈良時代の  
大仏造営において地域間で形成された文化である。

このようなひとつの地域から他地域へと伝わった地域文化をデジタルアーカイブ化するには、その経緯や歴史的背景、人々の思いや願いなど、地域間のつながりに着目し、丁寧に調べた上で、デジタルアーカイブ化する必要がある。



図5 神宝庫



図6 菅公腰掛石